

私の保育観



角尾 和子

難儀なテーマを眺めて夏を越してしまった。思いついて先輩のものを読んで、なるほど。そこで、先ず、

○「私の背景」について

私の年頃（年配？）で幼児教育の関係者の多くは、倉橋惣三先生の教えをうけている。関西で「私は森川正雄先生の教え子です。貴女は？」と挨拶を受けたこともある。残念乍ら私はそれらの日本の幼児教育近代化の父、先達から教えを受ける機会をもたなかった。だから……それだけでもないが、私の保育観は独学で

ある。師範学校で空襲警報を聞きつゝ教職者の道を学んだことや、その後力量不足を補いたくて学んだ心理学の研究が、見え隠れするという批評は否めないけれども、「保育」という幼ない者たちへの関わり方については、やはり独学というのがふさわしい。具体的には、クラスの幼児、夫（角尾稔）を含めて縁のあった人々、ひとり子の息子の育児、あちこちの幼児教育現場の見て歩き、等々の中で、聞き、確かめ、そして蓄積されていったともいえようか。

蓄積したものの中には、自分の考えの基本になって変らないものもある一方で、現在もなお迷いつつ模索中のものもある。

そのようなわけで、今風に云うと「私の」は独断と偏見に満ちたものであることをお断りしておいて、気楽に求められた紙数まで埋めさせていただくことにする。

○いつの間にか「子どもは自ら学ぶ」と信ずる様になつた

数年前のある研究会の席上のこと、私の発言の中の「大切なことは「待つ心」である」というのをとらえて、会場の人から「目標・内容を整えた指導計画の作成と、どう切り結ぶか、ぶつけて見なかった。」と指摘をうけてハッと気づいたのが、いつの間にか……であつた。

子どもはひとりひとり自分に必要な事柄を自分で学びとる力を持っている。しかし周囲の大人の都合に合わせてはその力を發揮しないから、大人たちは手前勝手に催促をする。子どもからその力が出てくるのを見守り、待つ心が大切である、と真底から思っている自分を発見したのは、その時であつた。

ひと頃私は、幼児の指導を考える時に、目標から日々の活動まで、論理的に發展させる工夫はないかと思案していた。その頃の子どもの見方と、「待つ心」を大切とするときの子どもの見方は大きな変化がある。それにもかかわらず、昨日から今日にかけて

急に看板がかけかわるといふものでもないので自分では気づかず日に日を過ごしていた。

「子どもは自ら学ぶ」このことを、人々の口から聞いて新鮮に感じたのは、創美(1)の活動中である。(一時は創美の事務局を引き受けて山のような郵便物の処理に忙殺されたことがある。)

創美の人々は、

「目と手の訓練の美術教育は過去のものである。教師の権威を押しつけて指導してはならない。子どもは生まれ乍らにして、誰に教えられたのでもなく乳を飲む術すべをしっているではないか。あの子ども自身も持っている自発性、生命力を發揮させて、子ども自身の自己を表現させよう。それが今の指導である。」

と熱情あふれんばかりに説いていた。今もその人々の顔やしぐさを、声音とともに思い出すが私はその頃、創美の人々の感動の渦の中で、「子どもは自ら学ぶ」ことをどうも頭でしか理解していなかった様だ。

その後創美の仲間の人々の実践を見、聞き、自分もそのあとをなぞる様にして、クラスの子どもの達の成長に関わり、とくに我が子の成長につきあううちに「子どもは自ら学ぶ」と確信をもつ様になつた。

そんな時期に、今は廃刊になつた「放送朝日」の対談の記事の

中に、黒丸⁽²⁾の研究がのっていた。

「健康体で生まれた新生児は、生まれ乍らに四つのリズムをもっている。そしてそれらはその後の生命維持、栄養補給、周囲の人との交渉にまで大きな役割りを果たす。」概略その様な記事であった。ふた昔以上前に信州で、幼年教育の合宿研究会があった時、夕食ごとに講師の末席に連なつて、興味深い話を聞いた黒丸氏の、その後の研究のたよりは、懐かしさと一緒に「人間は生まれ乍らに、自分で生きる力をもつて生まれて来ているのだ。」と大きな感動をもたらしただけであつた。

「子どもは自ら学ぶ」と信じて読む「育ての心」幼稚園保育法真諦は、すなおに心に落ちてしみとおひ、保育に関わり始めの頃とは、考えることもすることも変わってきた。

○「幼児の絵は生活している」をめぐって

⁽³⁾宮武辰夫氏は幼児の描画指導の著書に、右の名をつけた。常々「コックレル氏曰く、子どもの絵はその子どもの心をのぞく眼鏡である」と説かれていた。四ツ切り画用紙に不透明の水絵の具でかいた幼児画（三百枚くらい）を次々にめぐりながら、描いた子どもの生活、心の中を見とおす話を私が宮武氏から聞いたのは今

から二十八年前であつた。

迂闊な私は

「先生それを描いた子どもの顔を全部おぼえておられますか」と聞いた時の太い黒ぶちの眼鏡の奥でギロツと光つた目と

「それが分からなくて子どもの指導はできません。」という恐い声は忘れられない。

そんなイキサツがあつたのに私は自称東京の弟子のひとりとなり、亡くなられるまで、十年ほどの間に、子どもの絵は、その子どもの生活の記録であること、生活の善導なくして絵の指導はないことを学んだ。

宮武氏から学んだことに加えて、子どもの絵の見方の訓練は創美の活動でもうけた。

⁽⁴⁾川村浩章氏は「日本の児童画は、創美の出現によつて、数年にして一変した」と云っているが、その創美のユニークな活動のひとつに、「公開審査」や「絵のみかたを学ぶコンクール」があつた。それらは参加者各自、あるいは審査員が、選び出した絵について、何故この絵を支持するかを説明し、他の参加者と討論するのである。この時つかわれていた言葉は、私のそれまでの生活の中では聞いたことのない種類のものではあつた。

曰く「概念的でない。」曰く「デリケートな、それでいて積極的な

精神が満ちている。曰く「感情は割合いと整理されているが、静的であつて動的でない。」等々である。はじめは、選ばれる絵にも首をかしげたし、討論に用いられている言葉もチンプンカンプンであつたが、回を重ねてそのコンクールに参加するうち、自分の絵の見方というものに少しずつ自信が持てる様になつていった。今にして思えば「日本の児童画の一変する」その数年の間を創美の中にいたことになるが、その間、絵の見方を学ぶ中で、私は人間の教育の基本にふれることができた様に思う。

画用紙の片隅にコンコンと描く子や、小さく描いたその上をきたなく塗りつぶした絵を描く子は、何か屈託があつて自己を十分に表現できないでいる子どもである。この子どもたちに必要なのは、「もっと大きく描きなさい。」等の絵に直接する指導ではない。もっと広い生活の指導が必要である。教師は子どもの心の屈託の原因を見つけることを第一にすべきである。そして子どもが自分でそれを乗り越える事が出来る様に勇気を湧き出させなければならぬ。子どもが自分で屈託をのり越え生活に自信がもてたなら必らずその次に描く絵にはのびのびとした表現がみられるであらうし、教師は子どもが自己を十分に表現して心に屈託がなく満足する境地にまで導びいてやるがこの場合の指導である。そんな実践に近づこうと私自身努力する中で、人間と人間のふれ

合い、ぶつかり合いの中で教育が行なわれていくことを実感として受けとめる事ができたのは幸せであつた。

今私は、保育者養成の学校の一隅で、あらためて人間の教育を考えている。真の保育者養成は、保育の技術や知識の片々を教えるのでは足りない。人間の教育が必要である。心の豊かな、巾と厚みのある人間を育てるにはどうしたらよいのだろうか。この思ひは、私自身の人間修業の至らなさへも繋がる。難かしいけれども努力しなければならぬと考える日々である。

○想像の世界への入口を捜す

幼児期から想像力を豊かに養うことは、その子どもの将来を考えた時にも大事なことである。

子どもがごく幼ない時には、目に見えない想像の世界をみることはできない。レールの上を走る玩具の汽車が、トンネルの中に隠れた時にでも、その汽車の行方を想像できない時期がある。その子どもが言葉を理解してつかう様になるに従つて、目に見えない世界も想像できる様になつていく。

この想像の活動は事物に即した直接的な経験の機会が増えるほど、自由に幅広い想像ができるようになっていく。

さらに成長して、この想像の力をかりて、歴史・文学・地理・諸科学の原理、そして数学なども理解していくのである。

ひとりの人間にとって大切なだけでなく、科学の進歩、偉大な理論を生み出す仮説を産みだすのも想像力の働きなしには考えられない。

このように大切な想像力も、ジャンニ・ロダリー氏が「ファンタジーの文法」の中で、「現在の学校ではもっぱら〈注意力〉と〈記憶力〉が手をふって闊歩し、〈想像力〉はそのあわれな親類として扱われている」と嘆いているが、想像力の働きの偉大さを認めているのか、いないのか、教師はその育成に十分な配慮をしていないのではないかと、氣遣われてならない。

「絵本・紙しばいに親しみ、想像力を豊かにする」これは、領域・言語の中のねらいのひとつであるから、保育者は、想像力を豊かにする事を考えてはいる。しかし絵本、紙しばいだけでよいのだろうか。又絵本についてはA・ラマチャンドラン氏の次のことばもあることを指摘したい。彼は、

「物語があつて、それに絵をつけていくと、そこでは必ず『言語的』なさし絵をつけがちとなる。」「世界中どこにでも、子どもの文学には「空想する」という特性があるにもかかわらず、おかしなことにはさし絵にはそれが無い。今までのさし絵は、いって

みれば、イメージを言語的に解釈したものにすぎない。絵がそれ固有のイメージをつくりだしてはいない」と述べている。

仮りに子どもが絵本の物語を、読み聞かせてもらったとする。子どもは自分のもてるものをすべて動員して、様々に物語りの世界を想像したとする。その時間題となるのは見せられている絵本の絵によって子どもの想像がそこに立ち止まってしまいかもしれない。画家の解釈しかないと思ってしまうかもしれないことである。

その意味からはTVが、子どもの生活の中に占める場が広がってから、TVの良さと同時に損うものが多いことが云われて、ラジオや、素話を聞かせようと保育の場の見直しがあるのはよいことだと思う。しかし耳で聴いて人の話をもとに子どもが想像するだけではまだ不足の様思う。

ブライアンウェイは『ドラマによる表現教育』の中で「想像力を育てるには各人自身の想像機能を使う練習をいつもすることだ。これは他の人の想像の産物を鑑賞することではない。後者は前者より容易に行われるだろうが、前者は後者から決して生まれてこない」といっている。決して生まれてこない、と断言してよいかどうか、私はまだ不安であるが、彼が云わんとしている事には大いに賛成である。子どもたちの想像機能は、大人のそれにくら

べて現実の抵抗の意識の少ない分だけ自由に展開する。それだからこそ、子どもたち自身の想像機能を、どういふ機会や場で、發揮させてやったらよいのか、そのところで悩んでいる。

この事で一寸したヒントを得たのは、幼児とのクリエイティブドラマチックスの中の次の文であった。

「子どもが真の創造心を發揮することができるよう、彼を自由にしてやる指導者が子どもには必要である。……中略……ある五歳になる女の子が、自分のコートが電柱のほうに吹き飛ばされ、それを追っかけて行って電柱さんと一緒に食事したと、突拍子もないことをいいながら幼稚園にやってきた。この大変楽しいナンセンスを理解した先生は次の様に理解を示してやった。

「わたしはあなたと電柱を見かけたわ。何を食べていたの？」

その子はびっくりして聞いた。

「先生どこにいたの？」

「新しい帽子をかぶったピンクの子猫と一緒に通りを歩いていたらのよ」と先生は冗談をいった。女の子や他の子供達は大笑いした。

そしてその学年が終わるまで、何人かの子が何度も電柱さんについて新しい話を聞かせてくれた」という。

この話の中に出てくる先生の様に「子どもが描いた世界を共感

して会話する」というのは子ども自身の想像機能を使う刺戟になり、子どもの想像力を育てるのに意味のある活動のひとつではないかと思うのである。もうひとつ例えてみるなら、

「ふしぎの国のアリス」が飛びこんだ生け垣の下のおさぎ穴をぜひ見つけて、子どもと一緒に現代のふしぎの国を生活したいものだと思ふ。

うさぎ穴の入口、子どもの描く世界へ保育者が入りこむ口はどのように研究したらみつかるだろうか、難しいけれど今後の課題としたい。

(川村短期大学)

- (1) 創美(創造美育運動の略)一九五二年、久保貞次郎らによって創造美育協会設立。戦後の民間の美術教育運動のひとつである。
- (2) 黒丸正四郎 本文の他に、一九六九「幼児の世界 新生児の状態」日本放送出版協会 一九七九「新生児を見つめよう」幼児開発No.107 幼児開発協会
- (3) 宮武辰夫(一八九二—一九六〇) 著書に次のものがある「アラスカに原始芸術を探る」万里閣「幼児の絵は生活している」栗山書房「保育のための美術」恒星閣その他
- (4) 川村浩章 一九七九「なぜ美術教育を」美育文化八月号、美育文化協会
- (5) ジャンニ・ロダリ(Gianni Rodari) 「ファンタジーの文法」一九七八、窪田富男訳 筑摩書房
- (6) A・ラマチャンドラン (A. Ramachandran) 一九七八「眼を入れる」絵本の時代・今江祥智編 世界思想社
- (7) ブライアン・ウェイ(Brian Way) 「ドラマによる表現教育」一九七七 岡田陽・高橋美智訳
- (8) ジェラルディン・B・シックス(Geraldine B. Sixs) 「クリエイティブ・ドラマチックス子どものための創造教育」一九七三 岡田陽、高橋孝一訳